

2015年7月23日 掲載 物流ニッポン

物流戦略 トップに聞く

第一貨物（武藤幸規会長兼社長、山形市）はIT（情報技術）の活用により、輸送品質の改善や業務の効率化を推進している。また、トナミ運輸（綿貫勝介社長、富山県高岡市）、久留米運送（二又茂明社長、福岡県久留米市）と連携して幹線輸送の共同運行にも取り組む。武藤会長兼社長（71）は「人材、輸送品質が企業の発展・拡大を確実なものにする。そのため投資は少しも惜しまない」と意気込む。

—3社による共同運行 1月に中部・東海地区から関東向け、6月には



第一貨物会長兼社長
武藤 幸規氏

近畿から関東向けを開始した。中部・東海発は月曜から金曜の週5便、近畿発は土曜限定の1便を運行する。また、3社が共同で設立した幹線輸送の専門会社、ジャパン・トランス・ライン（JTL）では現在、東京・大阪で1日6便・往復12便を走らせている。

共同運行のメリットは理解できるが、遅々として進んでいない。今回の近畿発では、久留米運送の関東向けの貨物を、トナミ運輸と第一貨物が分けて積む。この結果、トナミ運輸と第一貨物は幹線便の積載率を高められ、久留米運送は

極めた。貨物追跡システムはPSS（ピーク・サポートシステム）とDST（デリバリー・サービス）を構成されて示す。このシステムが完成すれば、業務の更なる改善、労働時間の短縮も可能となる。

と、月ごと、更には方面別の輸送需要や輸送量を事前に予測する。また、DSTは「いつ、何時に届く」を荷主に對して開示する。このシステムが完成すれば、業務の更なる改善、労働時間の短縮も可能となる。

理解をいたいた取引先に対しては高品質な物流サービスの提供を未来永劫（えいこう）にわたって確約していく。企業の発展・拡大を確実なものにするのは、人材と輸送品質が最も重要だ。—2015年3月期業績と16年3月期予想はどうか。

人材・品質が最重要

3社共同運行、着実に

前期は、最大顧客である家電量販店顧客の売り上げ不振が長期化し、ロジスティクス部門が影響を受けた。この結果、売り上げ、経常利益ともに落ち込んだ。今期は売上高696億円、経常利益8億8500万円を目指す。輸送品質、取引条件、待遇の改善などに確実に取り組み、経営基盤を強固なものにしていく。

文 高木明
写真 高橋朋宏

幹線便1便を減らすこと務の効率化を図る。プロシエクトを立ち上げてか人前後採用している。このため、教育や待遇改善などに相当額の「原資」が必要。毎年「取引条件の改善」を重点施策に挙げていくのも、この原資を確保するための。ただ

◆企業メモ◆1941年山形合同貨物自動車設立、42年15社が合併して山形県第一貨物自動車に商号変更。59年東北・東京・大阪の路線（特種）事業を開始。97年3PL（サードパーティー・ロジスティクス）事業を開始。2009年営業本部を東京に移転。12年共同持ち株会社DTHD設立。資本金1億円、売上高681億8千万円、経常利益7千万円（いずれも第一貨物単体、15年3月期実績）。